

# とりたて詞「まで」「さえ」について

- 否定との関わりから -

茂木 俊伸

『日本語と日本文学』28, pp.(左)27-36  
筑波大学国語国文学会

1999年3月

# とりたて詞「まで」「さえ」について

- 否定との関わりから -

茂木 俊伸

## 0. はじめに

本稿は、一般に共に「意外」の意味を表すとされるとりたて詞「まで」と「さえ」の相違点についての考察を行うものである。特に、従来の研究の中ではあまり扱われてこなかった否定文における両者の振る舞いに着目し、「まで」「さえ」と否定辞のスコープ（作用域）の相対関係から両者の違いを捉える。

## 1. 先行研究における「まで」と「さえ」

そもそも「とりたて詞」とは、次のように定義される品詞論的カテゴリーである。

- (1) とりたて詞とは、文中の種々の要素 - これを自者と呼ぶことにする - をとりたて、これに対する他の要素 - これを他者と呼ぶことにする - との論理的関係を示す語である。(沼田(1986), p.108)

沼田(1986)によれば、今回考察する「まで」「さえ」の意味は、次のように表される<sup>1)</sup>。

- |              |            |          |            |
|--------------|------------|----------|------------|
| (2) a. 「まで」: | 主張・断定・自者肯定 | b. 「さえ」: | 主張・断定・自者肯定 |
| (意外)         | か          | (意外)     | か          |
|              | つ          |          | つ          |
|              | 含み・予想・自者否定 |          | 含み・予想・自者否定 |
|              | 他者肯定       |          | 他者肯定       |

この意味記述の範囲では、「まで」と「さえ」との間に意味的な差は見られない。しかし、両者は全く同じ特徴を持つわけではなく、先行研究においていくつかの相違点が指摘されている。これらの指摘の着目する側面には一定の傾向があるため、ここでそれをごく大まかにまとめて示すと、およそ次のような二点になるのではないと思われる<sup>2)</sup>。

- (3) 自者と他者との関わり方についての違い  
(4) 肯定文 / 否定文の別による違い

それぞれの観点に該当する主な指摘は、次のようなものである。

- (3') a. 「まで」がとりたてるのは命題を満たす可能性のある要素の集合内の最も中心から遠い要素であるのに対し、「さえ」がとりたてるのはその集合の外にある要素である。(寺村(1991), p.123)  
b. 「まで」はスケール上で含意される要素（本稿における「他者」）の存在が保証

されるが、「さえ」はこれと異なる。(山中(1991), p.33)

- (4') a. 否定文では、「さえ」と異なり「まで」は普通使われない。(寺村(1991), p.122)
- b. 「まで」は上限を表し、「さえ」は下限を表す。(Alfonso(1966), p.1130)
- c. とりたてられる要素についての意外性が、期待した以上に予想外であることから来る場合は「まで」が、期待に反して予想を下回ることから来る場合には「さえ」が使われやすい。(沼田(1992), p.11)

最近の傾向としては、(3)のような観点から、特に(3')bの方向性を発展させた形での議論が展開されている(伊藤(1997)、三井(1997))。直観的に、「まで」が連続した要素(他者)に自者が加わるイメージなのに対し、「さえ」は他者については関与せず、自者と他者が一対一の対立をなすイメージを持つと思われること、また、「まで」という形式の持つ一般的な意味(「範囲の限界」)と合致することなどから、これらの研究の記述は理解しやすい。しかし一方で、論点を話し手の認識や自者/他者と現実世界の事物との対応関係に帰着させることから、抽象的な議論であるという印象は否めない。

そこで本稿は、従来は肯定文と否定文の違いによる用法の差として処理されてきたもう一つの(4)の観点を再検討し、新たな分析を試みることにする。なお、(4')b・cに関しては、表面上は肯定文/否定文の問題と関わらないが、後述のように関連させて現象を整理できるためここに挙げた(これについては3節で述べる)。

## 2. 相対的スコープ

数量詞を含む否定文において、数量詞と否定辞のスコープの相対的な関係(どちらの要素のスコープがより広い/狭いのか、言い換えれば、どちらのスコープがもう一方の要素をその内部に含むのか)によって文の意味が変わることは広く知られる。

とりたて詞に関する相対的スコープの議論は、これまでまとまった形ではほとんど行われていない。しかし、一部のとりたて詞(主に「だけ」)について指摘されている同様の二義性<sup>3)</sup>は、とりたて詞と否定辞のスコープの相対関係から分析できる<sup>4)</sup>。

- (5) 寿司だけを食べない。
  - a. 「ダケ > 否定」の解釈:(他のものは食べるが)寿司だけ残す。
  - b. 「ダケ < 否定」の解釈:寿司の他にもいろいろ食べる。

本稿では、この相対的スコープの観点から「まで」「さえ」の議論を行う<sup>5)</sup>。

### 2.1 「まで」「さえ」と否定の相対的スコープ

「さえ」が否定述語と共起することは、山田(1936)等多くの研究で指摘されている。しかし、(4')aからも分かるように、「まで」に関しては否定文に現れるとする積極的な記述はなされていない。したがって、「まで」が否定文においても現れる、すなわち、「さえ」との差は分布的なものではない、ということをもまず次の例で確認しておきたい。

- (6) a. 花子までそのテストに合格しなかった。
  - b. 今年は誕生日プレゼントまでもらえなかった。

しかし一方で、野田(1995)が次のような指摘をしている。

(7) ?お茶まで用意しなかった。(野田(1995), p.27, 例文(107))

(8) 「(107)は、「お茶さえ用意しなかった」の意味にはならない。(「お茶までは用意しなかった」と同じ意味で使われることはあるが、その場合は「お茶まで用意するということはしなかった」という意味で、「まで」は否定と呼応していないと考える。)」(同, p.27)

つまり、否定文において、「まで」「さえ」の分布的な差はないものの、「まで」と「さえ」を交替させることで文の意味が変わる可能性がある、ということになる。ここから次のような疑問が生じる。

(9) 否定文において「まで」と「さえ」が自由に交替できないのはなぜなのか。

そこで実際に例文で考えてみると、「まで」「さえ」を含む肯定文の意味はほぼ同じになる<sup>6)</sup>が、否定文の場合、両者の可能な意味解釈の幅が異なることが分かる。

(10) a. 親にまで打ち明けた。

解釈：(やっかいな問題なので仕方なく)言い出しにくい、あるいは普段こんなことを話さない「親」にも打ち明けた。

b. 親にさえ打ち明けた。

解釈：言い出しにくい「親」にも打ち明けた。

(11) a. 親にまで打ち明けなかった。

解釈1：(誰にも言えない内容だったので)最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。

解釈2：(あまり問題を大きくしなかつたので)信頼できる他の人(「友人」等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

b. 親にさえ打ち明けなかった。

解釈1：最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。

解釈2：\*信頼できる他の人(「友人」等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

すなわち、「さえ」を含む否定文(「さえ」否定文)には一つの解釈しか存在しないのに対し、「まで」を含む否定文(「まで」否定文)は二つの解釈が可能である。

ここで、(11)の「解釈1」は、「まで」「さえ」のスコープが否定辞「ない」のスコープよりも広い、すなわち「まで」「さえ」が否定のスコープに含まれない場合(これを「W(ide)スコープ」とする)に生じるものである。この場合の「まで」は、「さえ」「すら」と入れ替えても文の意味はほとんど変わらない<sup>7)</sup>。

(12) a. 親にまで打ち明けなかった。(Wスコープ)

b. 親に(さえ / すら)打ち明けなかった。

一方の「解釈2」は、「まで」「さえ」のスコープが「ない」のスコープよりも狭い、すなわち、「まで」「さえ」が否定のスコープに含まれる場合(これを「N(arrow)スコープ」とする)に生じるものである。実際にNスコープが可能になるのは「まで」のみである

が、この場合次のようにパラフレーズできる<sup>8)</sup>。

- (13) a. 親にまで打ち明けなかった。(Nスコープ)  
b. 親にまでは打ち明けなかった。  
c. 親にまで打ち明けた、のではない。

ここまでの観察から、「さえ」はWスコープの解釈しか持たず、「まで」はN/W両方のスコープをとりうるということが分かる<sup>9)</sup>。また、(13)bのような「までは」はNスコープのみ可能になる。したがって、「まで」「さえ」否定文の相対的スコープの解釈の分布は次のようになる。

- |      |       |       |
|------|-------|-------|
| (14) | Wスコープ | Nスコープ |
| さえ   |       | x     |
| まで   |       |       |
| (までは | x     | )     |

以上のことから、とりたて詞「まで」「さえ」のスコープと否定のスコープとの相対的な広狭の関係は、次のようにまとめられる。

- (15) 「さえ」は常にWスコープをとるが、「まで」はN/W両方のスコープをとりうる。「まで」否定文が二義性を持つことは、次の例からも確認できる。

- (16) a. 今年は太郎まで学園祭に来なかった。  
b. 教室のブラインドまで直さなかった。  
c. お金を払ってまで寿司を食べない。

ただし、実際の例文や先行研究の記述を考え合わせると、否定文における「まで」は、話者によって内省が異なるものの、全般的にNスコープをとる傾向にあるようである。このことは、「まで」否定文の多くが、先の「までは」形、あるいは次の(17)のような文末の「のだ」「わけだ」「つもりだ」等の形式を含むこととも一致する<sup>10)</sup>。これらの要素は、「まで」が否定のスコープ内に含まれることを明示する要素であると言える。

- (17) a. 太郎までそのテストに合格したのではない。(Nスコープ/\*Wスコープ)  
b.\*太郎さえそのテストに合格したのではない。

以上のことをふまえると、(15)は次のように修正できる。

- (18) 「さえ」は常にWスコープをとるが、「まで」はN/W両方のスコープをとりうる。ただし、「まで」はNスコープをとりやすい。

このように考えると、(9)で示した「否定文で「まで」と「さえ」が自由に交替できない」という問題は、ここまで見てきた相対的スコープの特徴から説明ができる。つまり、「さえ」はWスコープしかとらず、「まで」はNスコープをとる傾向にあるため、多くの場合両者の交替ができない(交替により文の意味が変わる)と考えられるのである。

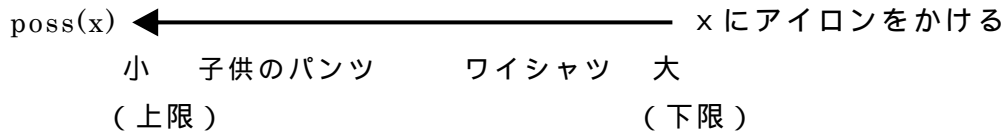
## 2.2 とりたての命題

さて、ここまで見てきた「まで」「さえ」の「スコープ」とは、「まで」「さえ」の「とりたての命題<sup>11)</sup>」に等しい。したがって、Nスコープは否定辞を含まない命題であり、W





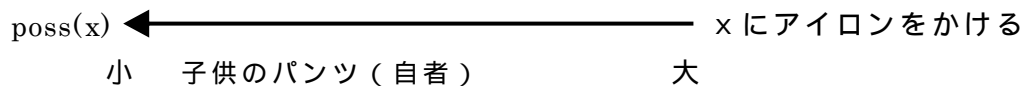
(33)  $P(x)$  :  $x$  にアイロンをかける



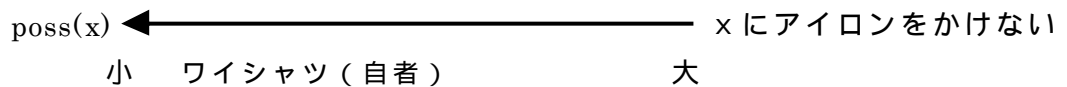
(33)の「 $x$  にアイロンをかける」可能性の高い方を基準として考えれば、肯定文の場合、基準から可能性の低い方へ向かって序列上に要素が並んでおり、最もその可能性の低い「上限」の要素がとりたてられることになる（これが「まで」肯定文(32)aに該当する）。一方、否定文の場合は、基準側の可能性の高い、言い換えれば「意外」でも何でもない「下限」の要素がとりたてられることになる（これが「さえ」否定文(32)bに該当する）。

このように考えると、(27)の「肯定文：上限：まで」「否定文：下限：さえ」の対応の問題は解決するように思われる。しかし、相対的スコープの観点から考えると、必ずWスコープをとる「さえ」と肯定命題に基づいた(33)のスケールとの組み合わせは矛盾することになる。したがって、(32)a・bに対してそれぞれのとりたての命題に合わせた別のスケールを考えなければならない。

(34) a. 子供のパンツにまでアイロンをかける。... $P(x)$  :  $x$  にアイロンをかける



b. ワイシャツにさえアイロンをかけない。... $P(x)$  :  $x$  にアイロンをかけない



ただし、(34)の二つのスケールは表裏一体の存在であり、(33)のようなある一定の話者の信念において矛盾しない（(33)のようなスケールは発話から独立して存在する「外在的スケール」とでも呼ぶべきものとして捉えられる）。これは、加藤(1989)の「否定は当該のスケールを逆転させる効果をもつ」(p.45)という記述とも合致する。

(35) 小 子供のパンツ (自者) ワイシャツ (他者) 大



このように考えると、(35)からも分かるように、自者は常に命題成立可能性を満たす「上限」の要素であることになる<sup>15)</sup>。

#### 4. おわりに

本稿では、とりたて詞「まで」と「さえ」の相違点について、否定文における現象に着目し、「まで」「さえ」と否定辞との相対的スコープの違いとして、これを分析した。「まで」「さえ」と否定の相対的スコープのありかたは次のようにまとめられる。

(36) 「さえ」は常にWスコープをとるが、「まで」はN/W両方のスコープをとりうる。



ただし、「まで」はNスコープをとりやすい。

((18)を再掲)

このようにスコープを用いて、とりたての命題に否定辞が含まれるか否か、という観点から分析することにより、スケールによる分析をも含めた従来の研究の記述をより整理することができる。

ただし、本稿で示した点は、「まで」「さえ」の相違点の一側面に過ぎない。したがって、先行研究の別の観点を含めた、より包括的な「まで」「さえ」に関する議論の必要がある。さらに、「まで」「さえ」の統語論的な側面における差についても議論の余地が残されている。本稿の議論は、文構造において「まで」「さえ」をどのように位置づけるか、という問題と密接に関連すると思われる。いずれも今後の課題としたい。

## 【注】

- 1) 本稿における「とりたて詞」の定義及び意味記述の方法等は、沼田(1986)の枠組みに従うものである。なお、沼田(1986)のとりたて詞の意味記述における概念「期待」は、沼田(1988)以降「予想」に修正されたが、本稿では混乱を避けるためすべて「予想」で統一した。  
また、本稿の考察の対象とする「まで」「さえ」は、沼田(1986)におけるとりたて詞「まで」「さえ<sub>1</sub>」である。これまで多くの研究で「さえ」と関連して分析されてきた「すら」に関しては、おおむね「さえ」と同様の振る舞いをするようであるが、ここでは扱いを保留する。とりたて詞に含まれない「まで」、あるいは「最低条件」を表す「さえ」(沼田(1986)における「さえ<sub>2</sub>」)を含めた「まで」「さえ」の意味の議論に関してもここでは扱わない。
- 2) この他に、文末のモダリティ形式との共起関係から「まで」と「さえ」の違いを捉えた研究として市川(1991)がある。このような視点は、沼田(1989)や野田(1995)のような、とりたて詞を文の階層構造上に位置づける議論と共に非常に重要なものであると考えられるが、本稿とは直接の関わりを持たないため、本文中には挙げなかった。
- 3) とりたて詞を含む否定文の解釈について触れたものには、近藤(1983)、Kato(1985)、案野(1993)等があるが、これらの研究は分析の枠組みが大きく異なる。ここでは現象のみに注目し、理論的な整合性の問題の議論は避けたい。
- 4) とりたて詞をスコープをとる要素とする研究は多い(勇(1965)、外池(1988)、沼田・徐(1995)、安部(1997)等)が、本稿における「スコープ」は、単純に「当該の要素が意味的に作用しうる範囲」と考える。なお、これは沼田(1986)における「とりたてのスコープ」とは異なる。
- 5) 本稿で扱う「否定辞」は、代表的な否定要素である助動詞「ない」である。「ず」「まい」「な」といった助詞・助動詞、あるいは「～(し)にくい」「～(し)そこねる」等の要素に関しても興味深い現象が観察されるが、紙幅の都合上省略する。
- 6) 肯定文における「まで」「さえ」の意味の差については、本稿の考察の範囲から外れる。この問題は、結局のところ(3)の議論に戻ることになるが、その前の段階として、これまで同時に扱われてきた(3)(4)の二つの視点を一度分離する必要があることを強調しておきたい。
- 7) Wスコープの「まで」「さえ」の場合も注6と同様のことが言える。
- 8) Nスコープの場合、話者によっては「までは」形でなければ許容しにくい可能性もあるが、本稿は「まで」自体の分析を目的としているため、「は」を外した形での議論を行っている。後述のように、この「は」はNスコープであることを明示するが、「まで」単独でもNスコープ解釈は可能であると考えられる。また、「までは」「までも」のようなとりたて詞の複合形に関して、可能なとりたて詞の組み合わせやこれらを含む文のスコープ解釈の問題があるが、ここでは考察できなかった。
- 9) 次のような例では、とりたて詞に前接する語の意味から「まで」のWスコープ解釈が不可能になる。  
例) 赤の他人にまで相談しない。(Nスコープ/\*Wスコープ)  
このような前接要素の意味や、その要素に関する話し手の一般的な認識といった語用論的要因によって「まで」否定文のスコープ解釈は大きな影響を受けるが、「まで」の本質的な議論の妨げになるため、

例文に関して不要な読み込みを極力排するように配慮をした。また、ポーズやアクセント、プロミネンスといった音声的な要因も文の意味的・統語的側面に関連すると思われるが、ここでは考慮しない。

- 10) 文末形式の介在については、田中(1998)が「～てまで」を含む否定文に関して同様の指摘をしている(p.57)。また、(17)から分かるように、「さえ」はこのような形式を含む文になじまない(同様の例文が Takemura(1973)に挙げられている(p.114)。なお、いわゆるメタ言語的否定はここでは考慮しない)。(17)b があえて解釈できるとすれば「さえ」の後にポーズを置く等の操作をした場合であるが、この場合には沼田・徐(1995)が指摘するような構造的な変化(p.180)が起こったと考えたい。
- 11) 益岡(1991)はとりたて詞を「命題間の範列的('paradigmatic')な関係を表す」ものとする(p.173)。ただし、本稿における「とりたての命題」は、モダリティと対立する概念としての「命題」と異なり、一定範囲のモダリティ要素を含むものとして捉える。この点に関してはなお厳密な議論の必要がある。
- 12) 肯定文か否定文かによる場合分けに問題があることは、「数量詞+も」に関して、三井(1994)が指摘をしている(p.211)。
- 13) この「スケール」という概念の捉え方は、先行研究によって様ではない(定延(1995), p.244)が、本稿では、記述の際の表示手段として便宜的にスケールの概念を用いるため、詳しい議論を避けたい。
- 14) 以下のスケールには他者をつつだけ挙げているが、現実には他者が複数想定される可能性もある。しかし、沼田(1995)が「も<sub>2</sub>」(「意外」の「も」)について述べている(pp.26-28)ように、自者・他者の対立において、具体的にどのような他者がどのような序列関係にあるかは問題にならないと考える。
- 15) つまり、スケール上における「自者<他者」の関係は常に保たれるのであり、中西(1995)の議論における「意外な自者へ向かう累加」(p.310)(本稿(28)(29)参照)、「意外な自者からの類推」(p.311)(同(30)(31)参照)という、自者を中心としたスケールの方向の区別は不要である。

## 【参考文献】

- 安部朋世 (1997) 「ダケのスコープと文中における境界」『日本語と日本文学』24, 筑波大学国語国文学会  
案野香子 (1993) 「副助詞と文の成分」『語文論叢』21, 千葉大学文学部国語国文学会  
勇 康男 (1965) 「日本語の構造(4)~(5)」『英語教育』13-11~12, 大修館書店  
市川保子 (1991) 「とりたて助詞と発話・伝達のモダリティに関する一考察」『文藝言語研究(言語篇)』19, 筑波大学文芸・言語学系  
伊藤智博 (1997) 「「まで」の表現機能に関する一考察」『日本語・日本文化』23, 大阪外国語大学留学生日本語教育センター  
加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」『日英語比較選書4 指示と照応と否定』研究社出版  
加藤泰彦 (1988) 「否定の作用域と文法表示」『上智大学外国語学部紀要』23  
(1989) 「文法 - 文の意味と否定」『言語』18-5, 大修館書店  
国立国語研究所 (1951) 『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例 - 』秀英出版  
近藤泰弘 (1983) 「副助詞の体系 - 現代日本語 - 」『日本女子大学紀要(文学部)』32  
坂原 茂 (1986) 「“さえ”の語用論的考察」『金沢大学教養部論集(人文科学篇)』23-2  
定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版  
田中 寛 (1998) 「「テモ」の周辺 - 「テデモ」をはじめとして - 」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』10  
寺村秀夫 (1989) 「意味研究メモ その1」『阪大日本語研究』1, 大阪大学文学部日本学科(言語系)  
(1991) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版  
外池滋生 (1988) 「否定 - 動詞・名詞の形態論との関わり - 」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 - 9 - IPAL(Basic Verbs)をめぐって - 』情報処理振興事業協会  
中西久実子 (1995) 「モとマデとサエ・スラ - 意外性を表すとりたて助詞 - 」『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版  
中野亜美 (1997) 「「意外性」を表す取り立て助詞「も」「まで」「さえ」の一考察」『さわらび』6, 文法研究会, 神戸市外国語大学  
丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13, 大阪市立大学文学部  
沼田善子 (1986) 「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社  
(1988) 「とりたて詞の意味再考 - 「こそ」「など」について - 」『論集 ことば』東京都立大学人文学部国文研究室, くろしお出版

- (1989)「とりたて詞とムード」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
 (1992)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ5 「も」「だけ」「さえ」など - とりたて - 』くろしお出版  
 (1995)「現代日本語の「も」 - とりたて詞とその周辺 - 」『「も」の言語学』ひつじ書房  
 沼田善子・徐建敏 (1995)「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版  
 野口直彦・原田康也 (1996)「とりたて助詞の機能と解釈 - 量的解釈を中心にして - 」『日文研叢書 10 制約に基づく日本語の構造の研究』国際日本文化研究センター  
 野田春美 (1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版  
 野田尚史 (1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版  
 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版  
 三井正孝 (1994)「<達成>のモ - 所謂<柔らげ>のモ - 」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂  
 (1997)「現代日本語に於けるとりたて詞サエの意味」『新潟大学国語国文学会誌』39, 新潟大学人文学部国語国文学会  
 茂木俊伸 (1997)『とりたて詞「まで」「さえ」の研究 - 否定との関わりから - 』平成九年度筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業論文  
 森田良行 (1980)『基礎日本語 2』角川書店  
 山田孝雄 (1936)『日本文法學概論』實文館  
 山中美恵子 (1991)「「も」「でも」「さえ」の含意について」『日本語と中国語の対照研究』14, 日本語と中国語対照研究会, 神戸大学  
 Alfonso, Anthony (1966) Japanese Language Patterns. Volume 2, Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.  
 Kato, Yasuhiko (1985) "Negative Sentences in Japanese," Sophia Linguistica 19, Sophia University  
 Takemura, Ken-ichi (1973) "Some Semantic and Syntactic Considerations about 'Sae' and 'Dake'," Papers in Japanese Linguistics 2;2

#### 【付記】

本稿は筑波大学第二学群日本語・日本文化学類に提出した卒業論文の一部に加筆・修正したものである。  
 本稿の内容に関して、第 11 回日本語文法談話会 (1998 年 12 月 12・13 日 於関西地区大学セミナーハウス) 他のさまざまな機会に多くの方々から貴重な御意見をいただいた。記して深く感謝申し上げます。

(もぎ としのぶ 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)

#### 【訂正】

注 8 (p.34) 3 行目:

誤: N スコープであることが      正: N スコープであることを

参考文献欄 (p.35)

誤: 加藤泰彦 (1988)      正: (発行年は 1989 年)  
 誤: 中西久美子 (1995)      正: 中西久実子 (1995)